埋蔵文化財

伏見城下の土木事業について

奥井　智子

１．はじめに

伏見城跡は京都盆地の東側を画する東山の南端，桃山丘陵西側の北東から南西に向かう緩斜面地の中腹に立地している。現在，この緩斜面には所々に平坦部分が認められ，伏見城築城の造成時に地形が大きく改変された際の名残りと考えられている。現在の地形は豊臣秀吉により造られたといっても過言ではない。

伏見城は，文禄元年（1592）の築城から元和九年（1623）の廃城までの31年間に，指月屋敷（Ⅰ期），指月城（Ⅱ期），豊臣期木幡城（Ⅲ期），徳川期木幡城（Ⅳ期）の４つの画期が想定され，特に慶長元年（1596）の大地震後の指月城（Ⅱ期）から豊臣期木幡城（Ⅲ期）への移行は，大きな画期と考えられている。

伏見城下の発掘調査では当時の建物や井戸や土坑など当時の生活を示す遺構や遺物が多く確認できるが，伏見城を形成するために行なわれた造成の痕跡も多数確認されている。その規模は屋敷地内で行なわれる堆積層の薄い小規模な造成から，厚さ２ｍを越える大規模な造成と様々である。

まずは，伏見城下の大規模造成について検討していく。

２．これまでの研究

これまで伏見城下の大規模造成については，1999年，森島康雄氏が府立桃山高校構内や周辺の調査成果をもとに検討を行っており[1)]，現在の伊達街道より西75ｍ地点から，府立桃山高校と京都府教育総合センターの敷地境までの範囲が木幡山伏見城期に盛土・整地された造成範囲であること，敷地境にある比高差10ｍほどの崖面はその名残であることを指摘している。同氏は2001年にこの造成土が北側へ及んでいることについても検討し，呉竹総合支援学校の西辺から北側の丹波橋通に回り込み，伊達街道へと，さらに北へ続くものと想定している[2)]。

2015年に筆者は，府立桃山高校の南側にあたる推定前田屋敷地内で発掘調査を行い，厚さ２ｍを超える造成土（写真１・２）を確認した。その際，現存する石垣や絵図なども踏まえ，その造成土の範囲と形成時期を検討した結果，推定前田屋敷地内の大規模造成土は府立桃山高校構内の調査や周辺の調査で確認された造成土と一連のものである可能性が高いこと，造成時期は木幡山伏見城が築城された時の整備に伴うものであると考えた[3)]。

これらの検討により，伊達街道西側では大規模な盛土造成が行われていたことが明

写真１　2015年調査　造成土断面（北東から）

写真２　2015年調査　造成土断面近景（東から）

表１　対象地内調査一覧

番号	遺跡名	調査区分	調査内容（報告書掲載内容）	出典
A	伏見城跡	発掘	上板橋通り及び伊達街道の拡幅工事に伴い，それぞれの道路沿いで，伏見城期の武家屋敷に伴う東西石垣，南北石垣，石組溝，犬走，路面，溝を確認。	「伏見城跡」『平成 10 年度京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2000
B	伏見城跡	試掘	GL-0.3 mまで盛土にて時期不明の南北溝。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成２年度　調査一覧表：伏見・醍醐地区（FD）図版番号 15-16　京都市文化観光局　1991
C	伏見城跡	試掘	GL-1.96 mで時期不明の土壙状遺構・落ち込み状遺構。	京都市内遺跡試掘調査概報　平成８年度　調査一覧表：伏見・醍醐地区（FD）№ 14　京都市文化市民局　1997
D	伏見城跡 ・福島太夫遺跡	試掘	遺構・遺物なし。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　昭和 54 年度』試掘・立会調査一覧表№ 474　京都市文化観光局文化財保護課　1980
E	伏見城跡	試掘	顕著な遺構・遺物確認できず	「伏見城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　令和元年度』　京都市文化市民局　2019
F	伏見城跡	発掘	敷地東半部では表土直下で地山。敷地の北西側では北に急角度で傾斜した赤褐色粘土層を確認。多数の瓦が出土。北西部ではトレンチの下部から石垣の裏込めと考えられる栗石を確認。	『伏見城跡発掘調査現地説明会資料』　伏見城研究会・龍谷大学考古学研究会編　1976.3.14　（森島康雄「考古学からみた伏見城・城下町」『豊臣秀吉と京都　聚楽第・御土居と伏見城』日本史研究会　2001）
1	伏見城跡	立会	盛土のみ。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成２年度　調査一覧表：伏見・醍醐地区（FD）図版番号 15-7　京都市文化観光局　1991
2	伏見城跡	立会	GL-1.15 mまで現代盛土。	京都市内遺跡立会調査報告　平成 14 年度　調査一覧表：調査№ FD160　京都市文化市民局　2003
3	伏見城跡	立会	検出できず。	京都市内遺跡立会調査概報　平成３年度　調査一覧表：伏見・醍醐地区（FD）図版番号 16-4　京都市文化観光局　1992
4	伏見城跡	立会	検出できず。	京都市内遺跡立会調査概報　平成６年度　調査一覧表：伏見・醍醐地区（FD）FD135　京都市文化観光局　1995
5	伏見城跡	立会	盛土のみ。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成４年度　調査一覧表：FD-234　京都市文化観光局　1993
6	伏見城跡	立会	GL-0.5 m以下、黄褐色砂泥の地山。	京都市内遺跡立会調査報告　平成１８年度　調査一覧表：調査№ FD369　京都市文化市民局　2007
7	伏見城跡	立会	GL-0.4 mまで現代盛土。	京都市内遺跡立会調査報告　平成１８年度　調査一覧表：調査№ FD357　京都市文化市民局　2007
8	伏見城跡	立会	GL-0.4 m以下、褐色砂泥の地山。	京都市内遺跡詳細分布調査報告書　平成 23 年度　調査一覧表：調査№ FD045　京都市文化市民局　2012
9	伏見城跡	立会	№１：GL-0.6m 以下、橙色泥砂の地山。№３：GL-0.4 m近世以降の土坑（軒平瓦、丸・平瓦）。№９ GL-0.7 m、時期不明の土坑。№ 13GL-0.4 m、時期不明の落込。	京都市内遺跡詳細分布調査報告書　平成 26 年度　調査一覧表：調査№ FD-023　京都市文化市民局　2015
10	伏見城跡	立会	表土下 0.6 mにて桃山の瓦を含む溝状遺構。0.72 mにて桃山～江戸の南北方向の溝状遺構１.	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報　昭和 56 年度』調査概要一覧表　図版 29-14　京都市文化市民局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1982
11	伏見城跡	立会	検出なし。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報　昭和 56 年度』調査概要一覧表　図版 29-22　京都市文化市民局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1982
12	伏見城跡	立会	傾斜地を盛土して整地。表土下 2.1 mにて桃山の瓦を含む層。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報　昭和 56 年度』調査概要一覧表　図版 29-15　京都市文化市民局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1982
13	伏見城跡	立会	伊達街道沿いに南北方向の桃山時代の溝を確認。	「伏見城（２）」『昭和 58 年度京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 58 年度試掘・立会調査一覧表：46　財団法人京都市埋蔵文化財研究所
14	伏見城跡	不時発見	西面を向く石垣を確認。	『伏見桃山の文化史』　加藤次郎　1953　P166

かになり，その範囲は，南辺が大手筋北側の段差近辺，北側については概ね丹波橋通であると想定できるようになった。

ただ森島氏の検討当時，府立桃山高校北側の範囲についての事例数が少なく，公開されている情報量も少なかった。しかし，近年新しい調査例も増えたことから改めて検討を試みた。その際，既存調査事例を再検討することで得た資料の提示と検討を通して得られた知見を示したい。

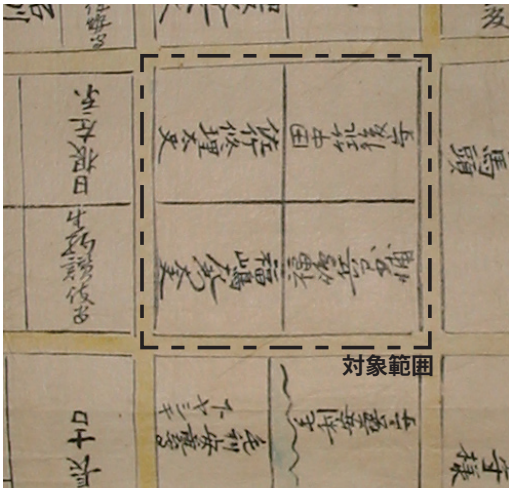

写真３　絵図内対象地該当範囲（上が北）

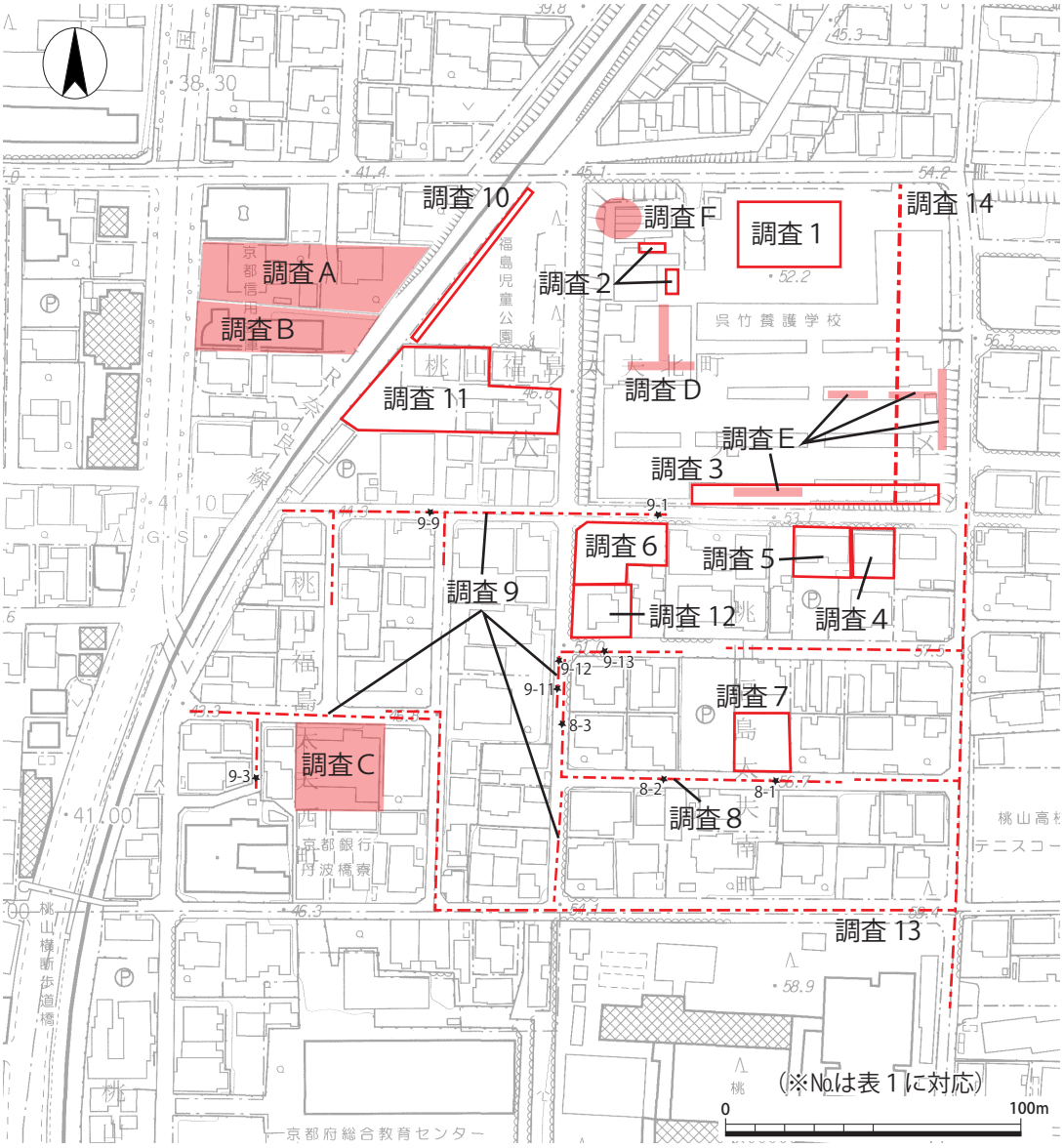

図１　対象地内各調査地位置図（１：2,500）

３．調査事例

対象とするのは，府立桃山高校の北側から市立呉竹総合支援学校北側の丹波橋通りまでの推定福島正則，福嶋兵部少輔，佐竹義隆，田中吉政の４屋敷地の範囲について検討を行う（写真３・図１）[4]。

当該範囲内での調査は，発掘調査が２件，試掘調査が４件，立会調査が13件，不時発見が１件，計20件が挙げられる（表１）。このうち，遺跡が確認されていると報告されているのは調査Ａ～Ｃ，Ｆ，９，10，12，13，14の９例で，概ね対象地の西半分に集中している。調査Ａ・Ｂについては，武家屋敷に伴う石垣や路面，溝が確認されている。地山上面に整地土が認められるが0.5ｍほどの厚みであり，屋敷内の平坦面を作り出すための整地と考えられる。他の調査についても同様で，あくまで屋敷地内の整地に留まるものと考えられる。対象地の東側に位置する調査の大半が，「検出できず」，「地山のみ」と記載報告されている。しかし調査12では，「傾斜地を盛土して整地。表土下2.1ｍにて桃山の瓦を含む層」との記載があり，整地されている様子が確認されている。市立呉竹総合支援学校の西側の南北道路を境に東西で様相が変わることが推測できるものの，一覧表中の記載に留まっている。

４．既存調査成果の再検討

今回は造成土の様相を把握することを目的とするため，遺跡の有無だけでなく，土層の状況を把握することが重要となってくる。伏見城下の調査事例が増えていく中で，かつての調査では決め手に欠け，断定できなかった事例も，周辺調査状況からよりその性格を推測することが可能になってきた。このため，これまでの調査の原図などを含む当時の記録を再検討することにより，新たな知見を得たいと考えた。

再検討を行った事例は，表１に示した調査Ｆを除く，すべての調査である。特に報告記載に「遺構・遺物なし」や「検出できず」，「検出なし」，「地山のみ」と記載されているもの[5]については，土層観察記録について，重点的に再検討をおこなった。実際，立会調査はその性質上，工事掘削深度が遺構面に達せず，盛土内に収まっているものや大きく攪乱を受けている事例[6]も多かったものの，調査当時の記載から，新たな知見を得ることができた調査もある。以下，調査Ｅ，Ｄ，３，４，６，９，12を中心に検討してゆく。なお，表１の調査Ｆについては，森島氏の論考中にその成果が記載されている[7]が，筆者の力不足で，資料を確認することができなかったため，今回，詳細を確認できていない。

調査Ｄ（図２・３）

市立呉竹総合支援学校内西側で行われた試掘調査である。調査区は南北方向と東西方向の２本がＴの字になるような形で行なわれた。遺構や遺物は確認されていない。断面記録は東西方向のＡ-Ａ’間，南北方向のＢ-Ｂ’間で行われている。断面図によれば１は「積土」と表記され，1.1～2.7ｍの層厚を確認している。２は赤褐色土とし，注記内に「地山ではない」との記載がある。このことから調査当時，２についても造成

図２　調査Ｄ　調査区位置図（１：1,000）

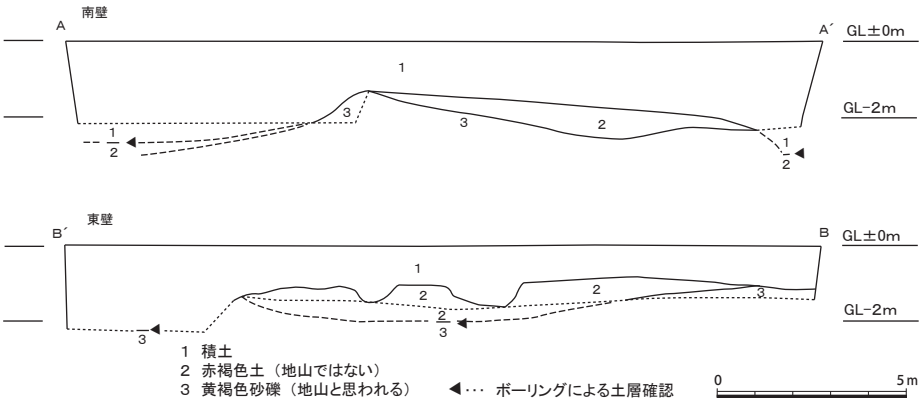

図３　調査Ｄ　調査区断面図（１：200）

土と想定していたことがわかり，３以外は造成土であると考えられる。

調査３・調査Ｅ（図４）

市立呉竹総合支援学校内南辺で行われた立会調査（調査３）と試掘調査（調査E）である。調査３は，「グラウンド土の下，GL-0.1ｍで地山を確認」と記載されている。調査Eは近接する場所で調査を行って

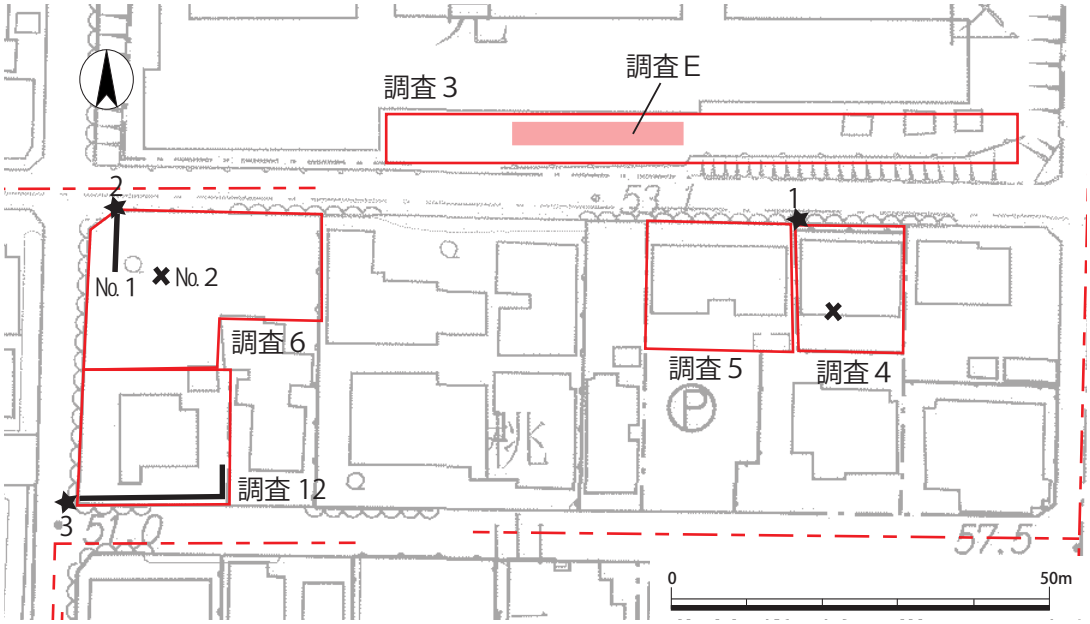

図４　再検討調査地及び調査地点配置図（１：1,000）

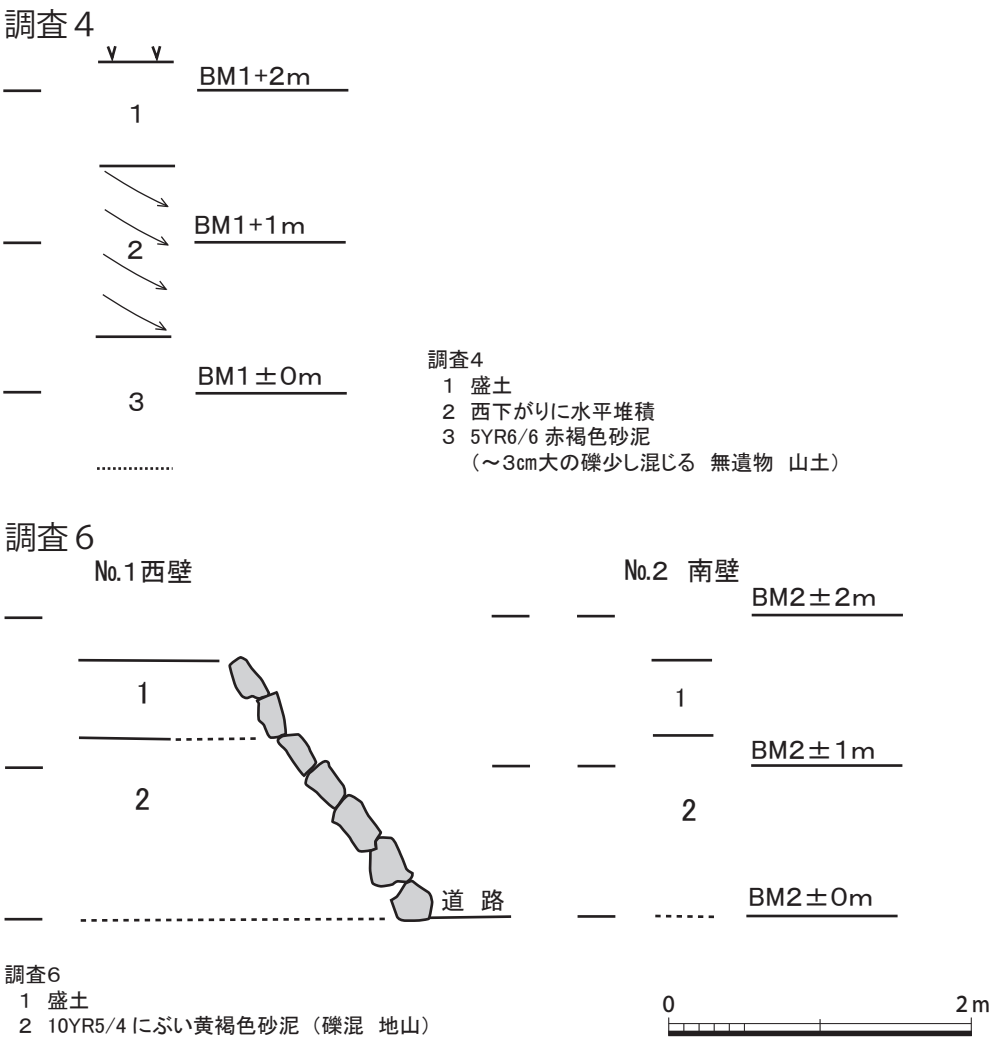

図５　調査４・６　調査地点断図面（１：50）

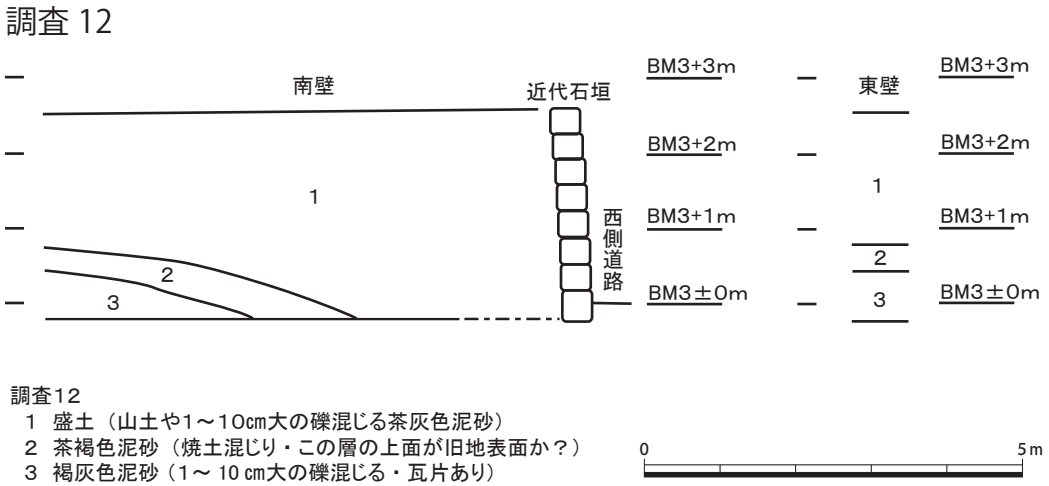

図６　調査12　調査地点断図面（１：100）

おり，GL-0.1ｍで固く締まる礫混じり橙色粗砂の地山が確認されており，同様の成果を示している。

調査４（図４・５）

個人住宅新築工事に伴う立会調査である。調査個所は敷地南西部（図４の調査４枠内の×）で，BMは敷地北側道路上の隣地境界（図４の★１）である。断面図上では，現代盛土の下，GL-0.7ｍ（BM+1.5ｍ）で西下がりに平行堆積，-1.84ｍ（BM+0.36ｍ）で３㎝大の礫が少量混じる赤褐色砂泥の地山との記載がある。伏見城下で認められる造成土も断面上では，一方向へ向かう平行堆積をしている場合が多く，記録上の西下がりの平行堆積（図５調査４－２層）は，造成土を示しているものと考えられる。当該地点での造成土の厚さは1.14ｍとなる。

調査６（図４・５）

個人住宅新築工事に伴う立会調査である。BMは敷地北側道路上の隣地境界（図４の★２），調査個所は敷地中央部（図４の調査６枠内の№１，№２）である。ともに層序は，現代盛土の下，GL-0.5～-1.7ｍ（BM±0～1.2ｍ）までが，にぶい黄褐色砂泥の地山（図５－２層）と記載されている。

調査９（図１）

埋設管に伴う道路上を対象とした立会調査である。計14地点で断面観察を行なっている。このうち№１，３，９，13地点について概要記載が行なわれている。報告記載がない地点は，基本的に盛土以下GL-0.2～0.7ｍでにぶい赤褐色泥砂や明黄褐色泥砂が確認されている。特に№１・11～13の４地点のうち，№１・13については報告記載がある。この他，調査記録によれば，№11はGL-0.4ｍで褐色泥砂，-0.73ｍで黄色砂質土ブロックの混じる明黄褐色砂泥，№12はGL-0.5ｍで小礫混じりの明褐色泥砂，-0.85ｍで粘質性のある明褐色泥砂が確認されている。また№13報告記載のある時期不明の落込みは明黄褐色砂質土で構成され，落込み形成面は橙色泥砂，下層では明褐色泥砂が続くことが確認されている。調査記録では№１で「地山」と判断した記載が確認できるが，この№１地点以外では，土層の性格には触れられず，「地山か不明」との記載があり，地山でない可能性

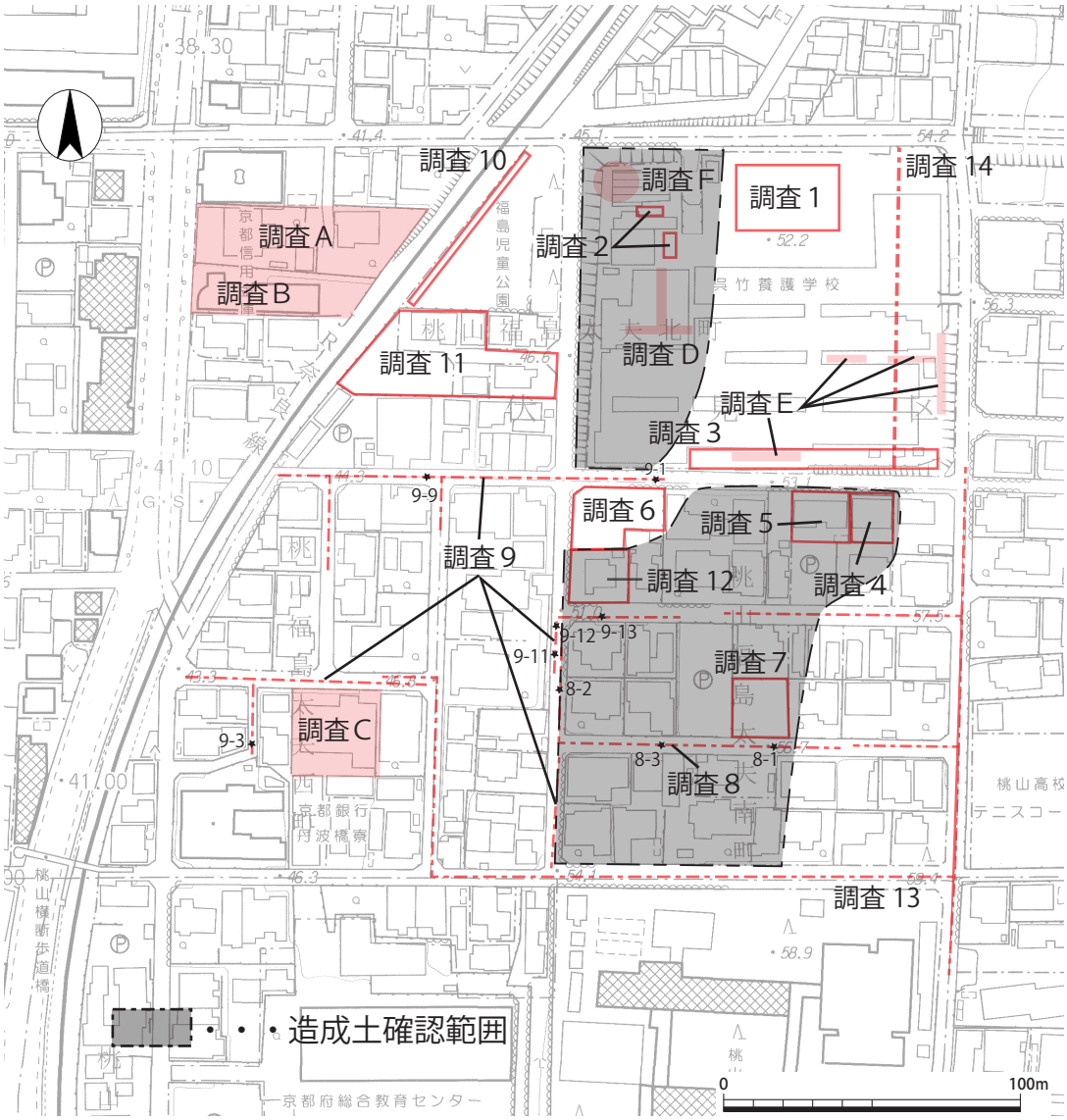

図７　対象地内で確認できた造成土の範囲（１：2,500）

を示唆していることから，造成土の可能性がある。特に№11の黄色砂質土ブロックの混じる明黄褐色砂泥は造成土の可能性が高い。

調査12（図４・６）

個人住宅新築工事に伴う立会調査である。BMは敷地西側道路上の隣地境界（図４の★３），調査個所は敷地南辺付近である。ともに層序は，山土や１～10㎝大の礫混じり茶灰色泥砂の盛土（図６－１層）の下，GL-1.8ｍ（BM+0.75ｍ）で焼土混じりの茶褐色泥砂（図６－２層），-2.1～-2.75ｍ（+0.45～-0.2ｍ）で１～10㎝大の礫や瓦の混じる褐灰色泥砂（図６－３層）とある。№２の南壁では土層が東から西へと下がっているのを確認し，焼土混じりの茶褐色泥砂については，この層の「上面が旧地表面か？」との見解が記されている。図面上に地山を示す記載はなく，いずれも造成土である可能性も調査時は検討されていたと考えられる。

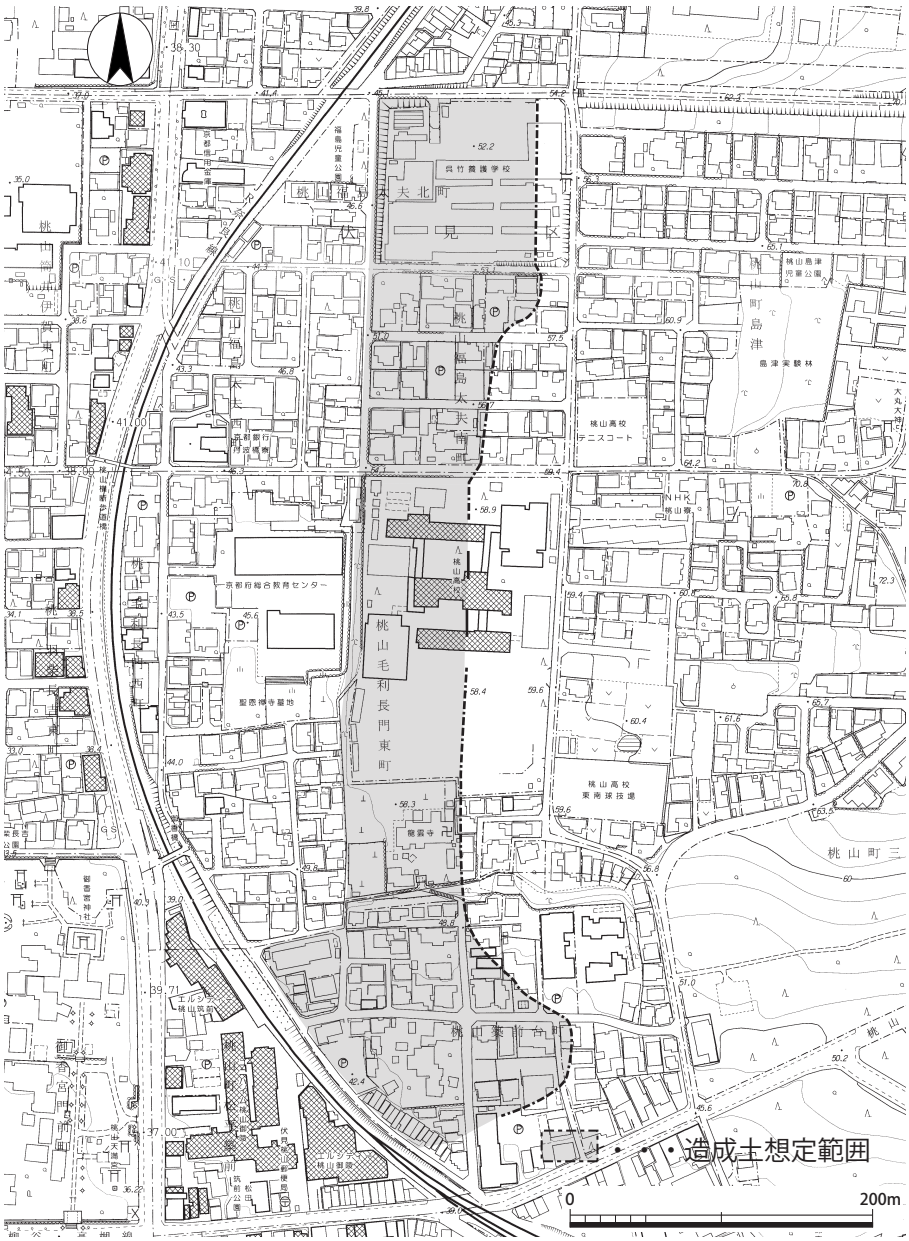

図８　大規模造成土の想定範囲（１：5,000）

５．造成土の範囲について

このように，調査D，調査４，調査12の地点では，少なくとも厚さ1.1～2.7ｍもの造成土と考えられる堆積土を認識していたことを確認できた。しかし，対象範囲の中央にあたる調査６ではBM+1.2ｍで地山，調査９の№１ではGL-0.6ｍで地山が確認されており，記録からは対象の堆積土が造成土の可能性を読み取ることはできなかった[8)]。

今回の検討で得た造成土の確認位置を図に示した（図7）。これを積極的にとらえるならば，対象地東側で造成土が確認されており，伊達街道の西側から現在の市立呉竹総合支援学校と学校西側道路との境に存在する約２～５ｍの段差は造成土により造られた地形であると考えられる。なお現状で

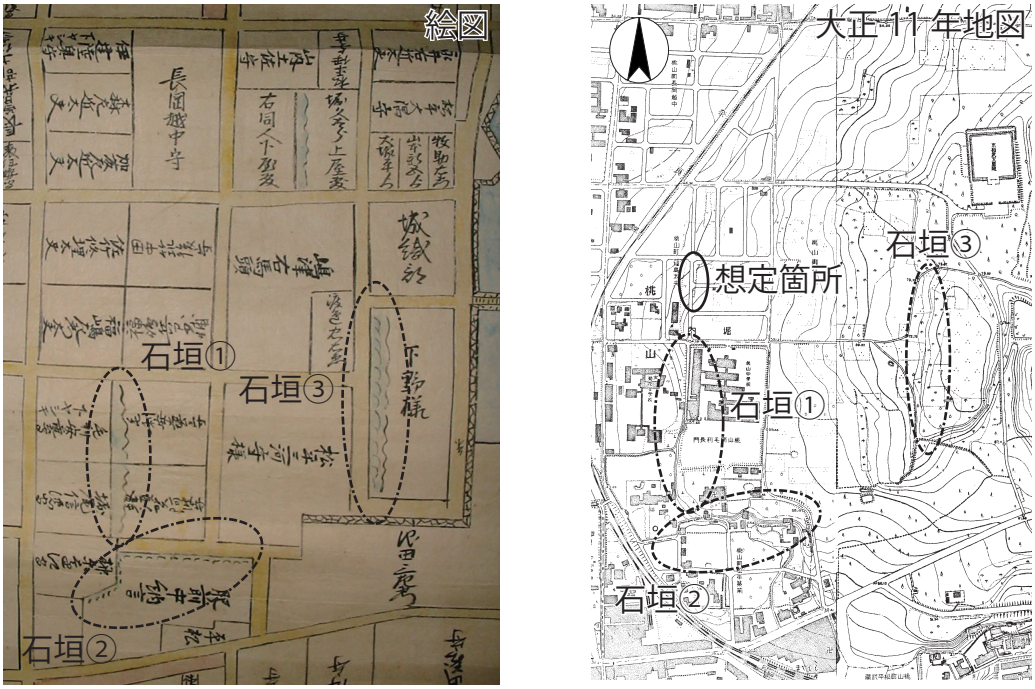

図９　各石垣の対象絵図と地図

は，調査９・12などの調査成果から比高差2.5ｍ以上，調査Ｄでは比高差５ｍ以上あったと想定できる。

また，これまでに示されている対象地南側の造成範囲[1・3]を勘案すると，大手筋から丹波橋通にいたるまでの広範囲に大規模な造成が行われていることを資料で示すことができた（図８）。

６．対象地西側の石垣について

今回示した総合支援学校の西側の５ｍの段差は，俗に「福島太夫段差」と呼ばれている。現状では石垣を確認することはできず，また調査13の際に石垣の裏込めかと考えられる栗石が確認されているものの，石垣自体は確認されておらず，その様相や形成時期についても不明な点が多い。現存する絵図などでも確認することができず，その段差に石垣を想定する根拠は弱い。しかし，絵図に描かれている石垣と現存する石垣，もしくは発掘調査で石垣やそれに伴う造成を確認できた事例は，桃山高校西側の約10ｍの比高差の石垣（図９－石垣①），推定前田屋敷地の北側に面する８～10ｍの比高差の石垣（図９－石垣②），推定松平忠吉の屋敷地西側の推定比高差約７ｍの石垣[9]（図９－石垣③）の３例が挙げられる。これら石垣が確認される箇所は，大正11年の地図上で，いずれもその痕跡をみることができる。今回想定している箇所（図９－想定箇所）でも一部その痕跡をみることができ，上記の３例と同様に，石垣を想定することは可能である。またこの造成土により形成されたと考えられる最大比高差が５ｍの段差に何かしらの土留めが行なわれていないとは考えにくく，かつては石垣が存在したものと現状は考えておきたい。

7．伊達街道との関係について

これまで，伊達街道より西側に広がる大規模造成の様相を示してきた。ここでは調査４の補足調査成果及び，調査13・調査14の調査事例に基づき，伊達街道と屋敷地東側の様相について示した後，推定島津屋敷や推定永井久太郎屋敷地などの伊達街道東側の調査事例[10]も踏まえ，伊達街道の様相について述べたい。

現在調査で確認している造成土の範囲は，最も東に位置する調査４である。現・伊達街道（図12－★８）と調査４のBM（図10・12－★１）との比高差は2.61ｍであり，調査４の造成土は，現・伊達街道路面から-1.11ｍで確認されていることとなる[10]。

調査13（図10）

埋設管布設に伴う道路上での詳細分布調査である。２地点で確認された南北方向の溝（SD1・SD2）は現・伊達街道より２～３m西側に位置しており，規模も埋土も同じ様相を示すことから，同じ溝であると考えられる。またSD３は建物の基壇を廻る溝の北，西，南の三方を確認したと考えられ，北と南には変成岩で造られた延石で溝が形成されていることが報告されている。この際の報告では，SD１・２からは桃山期の瓦が確認されているが，溝の性格には言及されていない。

調査14（図10）

昭和25年（1950）秋に京都学芸大付属中学校の敷地造成作業中に石垣が，不時発見された調査である。文中には，「伊達街道西方約二十メートルの地中に，南北に連る

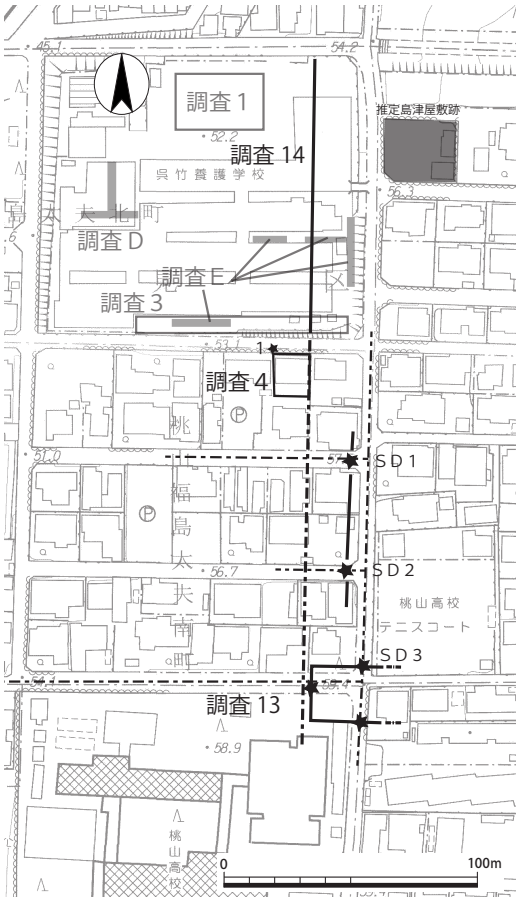

図10　伊達街道沿い関連調査位置図（１：3,000）

西面の高さ約一メートル半，延長約百メートルの石垣を発見し，その裏込栗石中から五六十枚の金箔瓦を発見した。大名屋敷の建築工事は大地震の後に行われたらしく，地震に依る破損瓦を栗石に混ぜて石垣の裏込にしていたらしく，完全な形のものは一枚もなく，どれも破損していた。」とあり，現・伊達街道の西20ｍ付近に高さ1.5ｍの西面を向く南北方向の石垣の存在と裏込めから金箔瓦が出土していたことが報告されている。

これらの関係性を，伊達街道東側の様相を踏まえ，街道と屋敷地[12]との概要を東西方向の断面模式図に示した（図11）。

図11で示したように遺構の配置関係から，調査13のＳＤ１・２は伊達街道の西側

溝，もしくは西側溝を踏襲した溝である可能性がある。これにより伊達街道の道幅が約12ｍと推定できる[13]。また伊達街道の西側には，想定西側溝から調査14で発見されている石垣までの間に約15ｍの広い平坦面も想定でき，道路と武家屋敷とを区画する塀や蔵などの建物，伊達街道に面した門などの施設があった可能性が考えられる。このほか，対象地南側の府立桃山高校構内で行った発掘調査では，対象地東側は表土直下に地山が確認されている。しかし今回対象とした屋敷地内の造成土は，対象地の東側にまで及んでいた可能性がある。このことは，対象地周辺の旧地形復元を行なう際には重要な知見になると考える。

8．まとめ

今回は既存調査の再検討を行ない，未報告項目の資料提示をすることを主に進めてきた。またその作業を進める際に得た大規模造成や伊達街道に関しての知見を示した。

伏見城跡では，多くの発掘調査が行なわれており，また，今回取り上げたような小規模な調査も数多く行なっている。伏見城の遺跡範囲は広大であるため，大規模な調査事例が少なく，様相が明らかでない範囲も多い。今回，小規模な調査を積み重ねて得た資料を再検討することで，新たな知見を示すことができた。今後も伏見城の様相解明に努めたい。

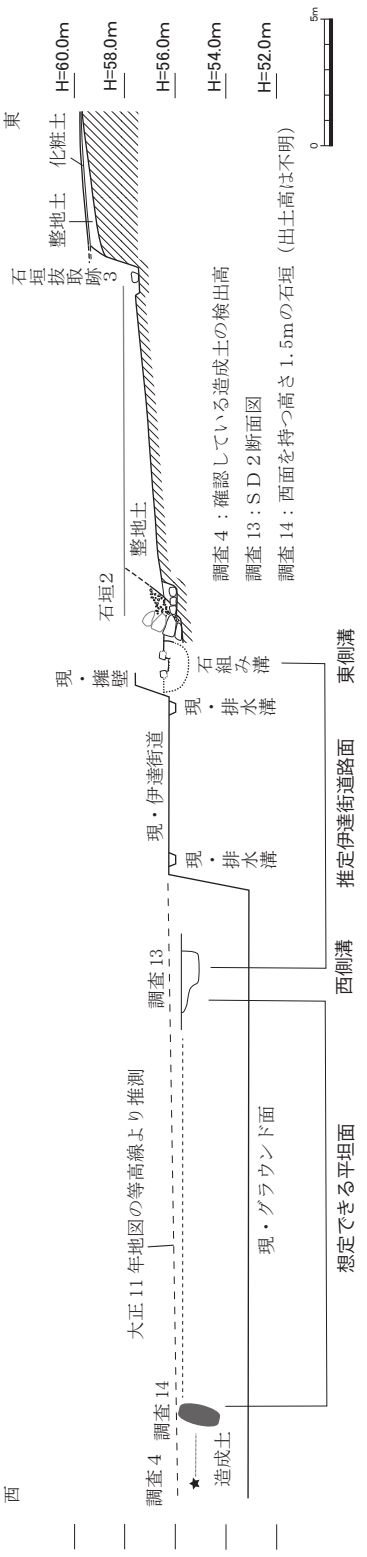

図11　伊達街道沿い様相概念図（１：300）

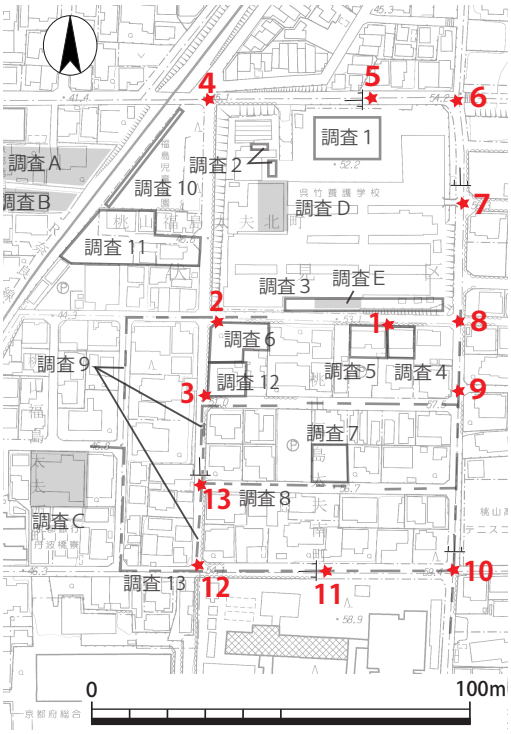

図12　各ＢＭ配置図（１：2,000）

補　足

今回，各調査資料を提示した。ただ調査の性格上，各調査成果を標高にて表示することができず，各調査成果を合わせるのが難しい。また対象範囲は，南北方向，東西方向にそれぞれ大きな高低差が認められる地形であり，特に東半分にその傾向が強く，平面上ではイメージしにくい。

このため，今回調査で使用されたＢＭとともに現状の高さを勘案出来るよう，図12に示した★１～13地点の高さの関係性を示す。対象地内で最も高い位置にある★10を基準とし，そこからの高低差を提示する。文中の現・伊達街道道路上は図12の★８に対応する。また，より地形のイメージができるよう，現地で目視確認できた，大きな変化点の箇所にはケバを記した（図12）。当該地の地形をイメージする参考にしてもらいたい。

★１：★10-4.61ｍ
★２：★10-10.87ｍ
★３：★10-8.77ｍ
★４：★10-14.04ｍ
★５：★10-9.44ｍ
★６：★10-4.71ｍ
★７：★10-2.72ｍ
★８：★10-2.00ｍ
（現・伊達街道道路上）
★９：★10-1.70ｍ
★11：★10-1.35ｍ
★12：★10-5.69ｍ
★13：★10-6.57ｍ

謝辞

本稿をまとめるにあたり，早川仁志氏，林友紀氏，吉本健吾氏には，現地測量などを含む，協力・助言を得た。記して感謝したい。

註

1）森島康雄「伏見城城下町の成立と過程」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室10周年記念論集―』大阪大学考古学研究室，1999年。

2）当時，500件近く行われていたとされる伏見城城下町での考古学的な調査成果を中心に，現存石垣や造成土，焼土層などの調査成果に基づいた町割りについて言及され，伏見城の歴史的把握を行なう際の方向性を示された。この際，大規模造成についても改めて検討されている。森島康雄「考古学からみた伏見城・城下町」『豊臣秀吉と京都　聚楽第・御土居と伏見城』日本史研究会，2001年。

3）写真１：図版32－３，写真２：図版32－５「Ⅸ　伏見城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成27年度』京都市文化市民局，2016年。

4）山田邦和「伏見城とその城下町の復元」『豊臣秀吉と京都　聚楽第・御土居と伏見城』日本史研究会，2001年。

5）どの視点で検討するかによって，事実報告の公開情報量の増減は避けられないことである。特に年間の調査件数が著しく多い場合，紙面の都合上，報告書の際に特筆事項がなければ，やむなく詳細記載を省略し，概要中心に報告していることが多い。今回の再検討を通し，図面の提示を含めた調査記録内容の提示を行なう。

6）調査１は，市立呉竹総合支援学校内運動場改修に伴う立会調査である。表層のGL-0.2ｍまでが工事掘削深度であったため，盛土のみを確認している。調査５もGL-0.4ｍまでが工事掘削深度であったため，盛土のみを確認するにとどまっている。

調査８は，３地点の土層観察が行なわれており報告記載は，№３地点（図１：８－３）の記録である。№１地点（図１：８－１）では盛土以下，GL-0.98ｍで花崗岩片を含む褐色砂泥，№２地点（図１：８－２）では盛土以下，GL-0.4ｍで地山ではない褐色砂泥が確認されている。

調査11は，宅地造成に伴う詳細分布調査で，２地点の調査を行なっているが，両地点ともGL-4.0～4.65ｍまで現代攪乱により荒らされていた。現代攪乱下では，腐植土層と考えられる褐灰色泥砂が確認されている。

7）森島氏（2001）によると，学校構内の北西側で北に急角度で傾斜した赤褐色粘土層が堆積し，多数の瓦が出土していること，北西部に設けたトレンチの下部から石垣の裏込めと考えられる栗石が見つかっていることが現地説明会資料に記されているとある。また未報告であるため，傾斜の堆積層の形成時期は不明であるが，西部から北部にかけて厚い整地層が認められることがわかるとある。

8）調査６と調査12は敷地が隣接している。調査当時，BMやGLに多少高低差があると見込んでも，南北約20ｍの距離のなかで，約1.2ｍの地山の高低差があることになる。また調査６と調査９の№１地点から約50ｍ北に位置する調査Ｄでは表土直下からGL-1.1～2.7ｍの間に造成土と考えられる土層が確認されることから，調査６地点付近のみ地山が突出した，起伏の激しい地形を想定することになる。伏見城成立前にそのような地形があった可能性は否定できない。

9）桃山高校西側の約10ｍの比高差の石垣（①）：註１参照。

推定前田屋敷地の北側に面する８～10ｍの比高差の石垣（②）：註２参照。

推定松平忠吉の屋敷地西側の推定比高差約７ｍの石垣（③）：「伏見城跡　京都市伏見区桃山町下野27-1の発掘調査」株式会社四門，2018年。

10）推定島津屋敷跡：『伏見城跡・桃山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-10，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2016年。

「伏見城跡・桃山古墳群（永井久太郎古墳）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成29年度』京都市文化市民局　2018年。

11）調査４のＫＢＭ（図12－★１）と現状の伊達街道中央部路面上（図12－★８）の比高差は2.61ｍである。2020年１月，測量。

12）今回取り上げた調査４・13・14の調査成果

及び，註９の報告成果（石組み溝部分・伊達街道西側の屋敷地部分）を合わせた概念図を作成した。

石組み溝部分：図８・９参照「伏見城跡・桃山古墳群（永井久太郎古墳）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成29年度』京都市文化市民局，2018年。

伊達街道西側の屋敷地部分：図17　石垣２・石垣抜き取り跡３雛段造成復元模式図（１：200）を一部加筆。『伏見城跡・桃山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-10，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2016年。

13) 現在の街並みと多くを重複している伏見城下の調査で道幅を特定できる事例はない。しかし昭和60年度発掘調査やその南隣接地で行った平成15年の試掘調査の際に，現在の道阿弥町通の東側で門跡が確認され，その門前に南北方向の溝が２条確認されている。この溝は両調査成果より約58ｍにわたって確認されており，道路側溝と考えられる。現在の道阿弥町通は伏見城期の道路をほぼ踏襲しているものと考えられるため，道阿弥町通りの道幅と溝までの幅を加算した幅が少なくとも当時の道幅と想定できる。溝１を東側溝とした場合には約11ｍ，溝２を側溝とした場合には幅が約13ｍの道路幅を想定することができ，今回想定した道路幅と近い値を示しており，現状では，道路幅を約12ｍと提示しておく。

昭和60年度発掘調査：「伏見城跡２」『昭和60年度京都市埋蔵文化財研究所調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1988年。平成15年度試掘調査：「Ⅳ３　伏見城跡・御香宮廃寺跡・金森出雲遺跡　№57」『京都市内遺跡試掘調査概報平成15年度』京都市文化市民局，2004年。

引用・参考文献

「伏見御城郭並屋敷取之絵図」（京都市所蔵）
「伏見」大正11年測図　京都市土木局都市計書課
「桃山」大正11年測図　京都市土木局都市計書課
『伏見桃山の文化史』 加藤次郎，1953年。
「伏見城跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-1)』京都府教育委員会，1980年。
「伏見城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第８冊，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター，1983年。
「伏見城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第44冊，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター，1991年。
『史料　京都の歴史』第16巻　伏見区　京都市　1991年。
「伏見城跡平成５年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第59冊，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター，1994年。
「伏見城跡」『京都府中世城館跡調査報告書第３冊－山城編１－』京都府教育委員会　2015年。

奥井（おくい）　智子（ともこ）（文化財保護課　文化財保護技師（埋蔵文化財担当））